



妙法寺伽藍建築の復元研究 —松木家文書を中心にして—

K04035 笠原 照乃

I はじめに

I-1 研究背景

現在の山梨県である甲斐国は、15～16 世紀に守護であった武田氏や、徳川家康や江戸幕府によって統轄され、城郭や城下町の建設、寺社の造営などが盛んに行われるようになった。甲斐国の土地柄、木材が多く手に入ることなどから、大工を仕事にする人が多くなり、城下町を中心に生活するようになった。

江戸時代中期以降に活躍がめざましい大工集団のなかに、下山大工がいる。下山大工とは、山梨県の下山を中心に活躍していた大工集団で、その中に松木左内も所属していた。松木左内が手がけた社寺建築は現在も山梨県に残っている。その松木左内の子孫である松木敬仁氏から、所蔵されていた文書を見せてもらうことが出来た。その文書は小室山妙法寺伽藍建築の絵図で、本堂、鐘楼、開山堂、子安堂などが描かれている。本堂と子安堂の絵図にはそれぞれ松木左内、松木高造の名前があり、彼らは伽藍建築の設計に携わっていたことが伺える。

I-2 研究目的

松木敬仁家文書を基に、松木左内が設計した本堂の設計手法を考察し、当時の妙法寺本堂を復元する。また、妙法寺の伽藍建築の一つである子安堂は、松木高造によるもので、絵図の中で唯一現存する建築物である。子安堂と平面が似ていて、立地場所も妙法寺から近い永泰寺釈迦堂を比較し、松木左内—高造の設計の特色を明らかにする。

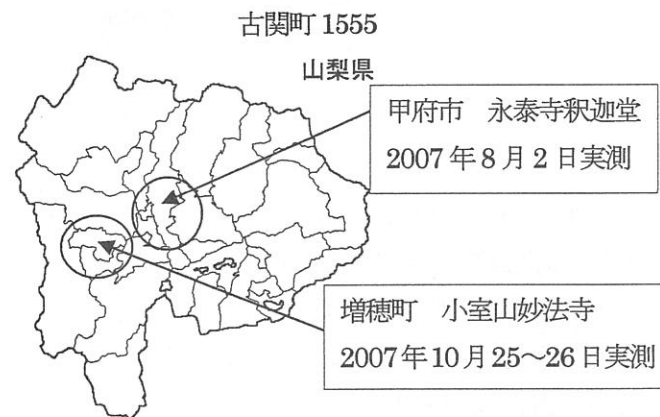
I-3 研究方法

- ① 小室山妙法寺伽藍、永泰寺釈迦堂を実測調査する。
- ② 松木敬仁家文書の絵図を分析する。
- ③ 妙法寺伽藍の現存していない本堂を、史料を基に 3 次元復元する。
- ④ 妙法寺本堂の設計の特徴をまとめる。
- ⑤ 子安堂と永泰寺釈迦堂を比較する。

指導教員 伊藤 洋子 教授

I-4 調査対象建築

- ① 小室山妙法寺…山梨県南巨摩郡増穂町小室 3063
- ② 永泰寺釈迦堂…山梨県甲府市 (旧上九一色村)



【図 1】調査対象建築物位置

II 下山大工について

II-1 下山大工について

下山大工は、武田氏の重臣である穴山梅雪が下山に城を築き、その城下に大工を集住させたことから歴史上に登場する。武田氏滅亡後も大工に与えられた権利は継続し、その後三郡出入や職業出入などを経て、甲斐国を中心として広範囲に優れた作品を残す大工集団となった。

II-2 家系について

【表 1】松木左内家系図

名前	松木左内	(高造)	豊寿	英一郎	敬仁
年代	1821～	1870以前～	英一郎の父 1882?～	1927～	現当主

松木敬仁家文書の絵図により、安政 5 年 (1858) のとき松木左内は 38 歳であると書かれていた。数え年と考えられるので、左内は文政 4 年 (1821) 生まれであることが分かった。別の絵図に名前が書かれていた松木高造は、明治期に活躍しており、明治 9 年 (1876) に旧春米学校の建設にもあたっている。高造の名前が入った絵図を左内の子孫である敬仁氏が所有していたことと、左内・高造、両者の活躍年代から、左内と高造は親子ではないかと推測される。

III 妙法寺について

III-1 歴史

増穂町と鯉沢町の境の山麓を分け入った閑雅な山塊一体を小室山といい、妙法寺はその中心にある。持統 7 年 (693)、役行者によって創始された。やがて、修験の道場・仁王山護国院金胎寺となり、長い間東国 33 カ国の山伏を支配したといわれている。

文永 11 年 (1274)、住職の恵頂が日蓮との法論に破れて日蓮宗に改宗、以後、日蓮ゆかりの法華寺院となり、名前も徳栄山妙法寺と改めた。恵頂も日蓮の弟子となって名も日傳と改め、妙法寺開山となった。

真言系修験の拠点であった金胎寺の転宗によって末寺、塔頭また近在の真言寺院が日蓮宗に転宗していった。

III-2 現在の伽藍について

【表 2】現在ある妙法寺の建物

名称	年代	棟梁	実測調査
本堂	平成12年(2000)11月3日竣工		×
子安堂	明治4年(1871)11月13日竣工	松木高造	○
祖師堂	大正7年(1918)10月19日再建	二ノ宮新吉	○
鐘楼	昭和2年(1927)10月再建		○
総門	享保年間(1716～1736)再建	不明	×
三門	明治20年(1887)再建	二宮亀吉	○
書院	安政6年(1859)8月13日竣工		×
庫裡	明治12年(1879)9月再建		○
常経堂	安政2年(1855)10月12日竣工		×

本堂は昭和 47 年 (1972) 8 月に火災によって焼失し、平成 12 年 (2000) に再建された新しい建物である。10 × 11.5 間 (18180 × 20907) の規模で、正面三間、側面四間、向拝一間、二重屋根入母屋造、平入である。

IV 本堂の復元

IV-1 松木家文書の絵図について

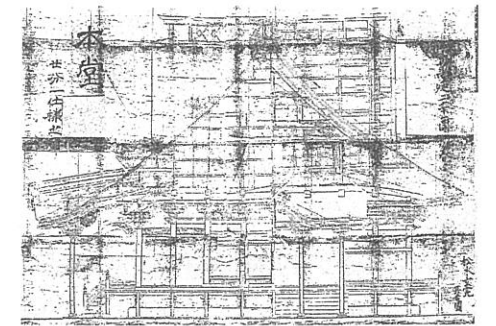
松木敬仁家文書は、小室山妙法寺の伽藍建築の絵図を中心とし、全部で 7 点ある。本堂は、安政 5 年 (1858) に下絵図 (表 3 中、1) が、その 3 年後の萬延 2 年 (1861) に、仕様図 (表 3 中、2) が描かれている。下絵図は、

詰組で四手先、仕様図は、組物は三手先、中備が臺股になり、手挟や海老虹梁などは下絵図にはなかった絵様が

【表 3】松木敬仁家文書 絵図リスト

項目	大きさ(mm)
小室山 本堂下繪圖 1 安政五 午 四月吉日 松木左内玄完 壽三十八歳	1280×1790
本堂 廿分一仕様之圖 2 萬延二年 酉 初春 松木玄完 正著圖	1385×2010
小室山 鐘樓下繪圖 3 安政五 午 四月吉日 松木左内玄完 壽三十八	1190×1085
小室山 開山堂下繪圖 4 明治三年 午/正月吉日 下山 松木高造	943×920
小室山 子安堂 棟梁 松木高造	920×1235
小室山 祖師堂 棟梁 稲葉関太郎	760×1085
縮尺 四拾分一 7 無題	465×730

描かれている。妙法寺銅版画 (図 3 後掲) に描かれた本堂は、この仕様図に基づいて建立されたと考えられる。



【図 2】本堂廿分一仕様之圖

IV-2 昭和 47 年に焼失した本堂について



【図 3】妙法寺銅版画の一部

図 3 は、妙法寺の伽藍配置が描かれている銅版画で、明治 36 年 (1903) 4 月に作製されたものである。左から順に、開山堂、本堂、祖師堂となっている。絵図より、松木左内が本堂を建てたのは萬延 2 年 (1861) 以降である。萬延 2 年から明治 36 年までの間の記述に、「明治 5 年 (1872) より同 18 年 (1885 年) までの間に本堂、客殿、大回廊、庫裡、祖師堂、不退堂、書院 等々修繕」とあるが、再建ではないことから、図 3 の本堂は左内が手がけた本堂と思われる。また、「明治 41 年 (1908) 祖師堂、本堂、開山堂等焼失し貫首他界」「大正 7 年 (1918) 10 月 19 日祖師堂再建」「昭和 47 年 8 月 13 日本堂焼失」と記述がある。この記述の祖師堂は現存するものにあたり、現在本堂の隣ではなく、庫裏の隣にある。なお、開山堂は今も再建されていない。また、昭和 47 年に焼失した本堂を知る滝沢氏に話を伺ったところ、本堂周辺には他の建物はなかったという。

写真 1 は昭和 47 年に焼失する前の本堂で、図 3 と比較すると、屋根の形状が異なっている。また、図 2 と妻飾りの組物の数、鬼板の形状の違い、臺股の有無が見られた。



【写真 1】焼失前の本堂正面

以上のことから、松木左内が手がけた本堂は、明治41年(1908)に祖師堂、開山堂と共に焼失し、それは図2に示された建築で、昭和47年に焼失した本堂は明治41年以降に建てられた別の本堂であると考えられる。

IV-3 本堂の絵図分析

(1) 絵図に書かれていた文字

「本堂廿分一仕様之圖」には48ヶ所の文字が記入されており、ほとんどが小屋組の材の長さや間隔、勾配を示している。そのうちの一つに、「地形より箱棟頭峯迄八丈五尺高サ」と書かれたものがあり、これは地面から棟上までの高さが八丈五尺(25755mm)であると読める。

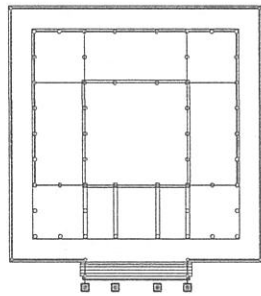
(2) 本堂の形状

絵図「本堂廿分一仕様之圖」(図2)を参考にして本堂の形状を読み解く。この絵図一枚に正面と側面の立面図、小屋組図が書かれている。側面の立面図は、建物内部に一間入ったところから見たものであるとして参考にする。

本堂は、正面七間、側面八間、向拝三間、入母屋造である。正面中央の柱間を大きく取っているため、平面構成は正方形になる。向拝は、軒唐破風、組物は二手先である。本堂の軸部は三手先、中備は臺股である。正面中央三間の身舎柱より前方に大虹梁を渡し、虹梁大瓶束で小屋組を支えていると考えられる。

IV-4 3次元復元

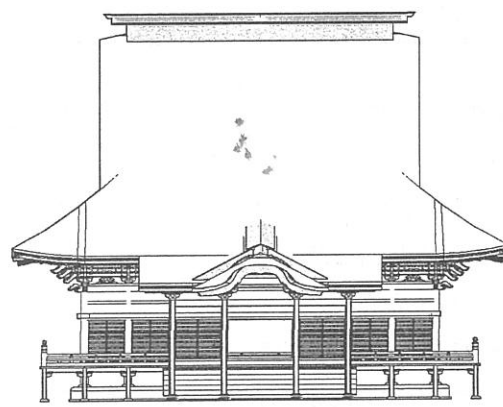
図2を基に平面形状を決定し、部材を立ち上げていく。内部の詳しい柱配置や桁行後方の形状は、絵図から読み取ることが出来ないため、類例建築より推測を交え、軸部構成を復元した。



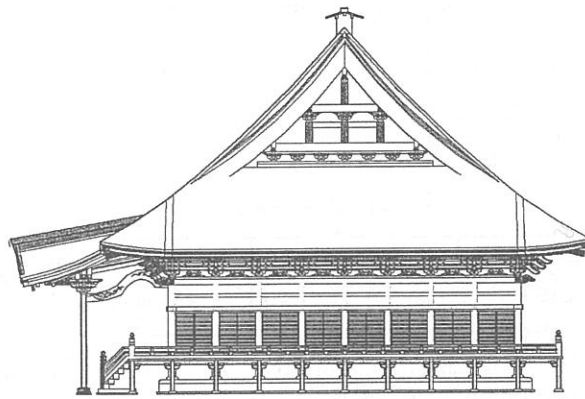
【図4】本堂平面図(復元)



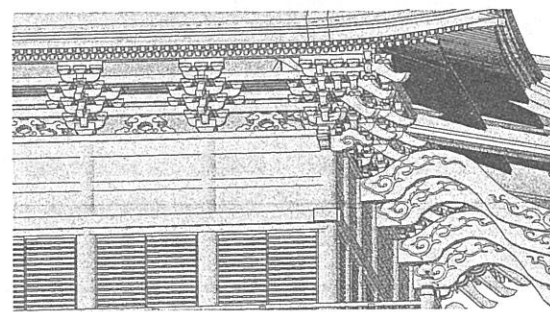
【図5】妙法寺本堂 パース



【図6】妙法寺本堂 正面図



【図7】妙法寺本堂 側面図



【図8】妙法寺本堂 軸組

V 本堂の検証

本堂による松木左内の設計手法の特徴を知るために、『匠明』堂記集七間四面堂を参考にする。その際、身舎柱の太さに対する割合を用いることとする。その結果、妙法寺本堂の特徴は以下の通りである。

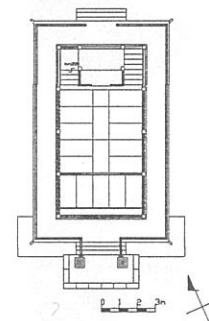
- ① 桁行中央柱間、その隣の柱間、隅の柱間がそれぞれ広がっている。長押内法高さは低くなっているが、飛貫を用いているのもあり、縁板上部から柱貫(頭貫)の上部までの高さは高くなっている。
- ② 大斗の成は大きくなっているが、大斗繰が小さくなっている。巻斗や肘木の成や幅には大きな違いは見られない。

- ③ 大軒の長さは匠明の1.3倍になり、小軒は2倍になっている。また地杵と飛檐杵の勾配が3.4寸勾配、2.4寸勾配で、傾斜がゆるやかである。
- ④ 縁の高さと広さが大きくなっている。
- ⑤ 擬宝珠は全体的に大きくなっていて、擬宝珠の太さに対する高さの割合が大きくなっていることから、縦長に伸びたといえる。
- ⑥ 臺股が小さくなり、その上部には巻斗が乗って桁を支えている。

VI 子安堂と永泰寺釈迦堂の比較

VI-1 対象建築物

(1) 子安堂



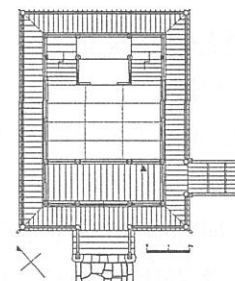
【図3】子安堂平面図



【写真2】子安堂正面

子安堂は、絵図に書かれている建築物のうち唯一現存するものである。正面二、五間、側面四間の縦長で、入母屋造、妻入、向拝一間、棧瓦葺である。棟梁は松木高造で、明治4年(1871)11月13日に竣工された。精巧な彫刻が多数施されている。

(2) 永泰寺釈迦堂



【図9】釈迦堂平面図



【写真3】釈迦堂正面

正面三間、側面四間、四周に切目縁を回らす入母屋造、妻入、向拝一間の江戸時代後期の建物である。屋根は茅葺であったが、昭和35年(1960)の台風で破損以後現在の鉄板葺に改められた。桁行四間のうち正面側奥行一間を外陣、次の二間を内陣、背面の一間を内々陣とする。向拝上部の臺股、手挟、内陣外陣境の欄間などに彫刻が施され、多様な彩色もなされている。

VI-2 比較検証

子安堂と永泰寺釈迦堂を比較するために、身舎柱の太さに対する各部材寸法の割合を求める。子安堂において、実測調査で寸法を測っていない部分は、遺構と大きな違いが見られないので絵図の値を参考とする。

永泰寺釈迦堂に対する子安堂の相違点は、

- ① 梁間が狭く、桁行が長くなっていることから、縦長の平面形成である。
- ② 広縁が広く、軒の出も大きい。勾配も緩やかである。
- ③ 組物は、大斗の成が小さく、巻斗も全体的に小さくなっているため軸部の大きさが縮小している。
- ④ 向拝は軒唐破風である。
- ⑤ 子安堂は精巧な彫刻が施されており、永泰寺釈迦堂は彫刻以外にも組物の表面に彩色がなされている。
- ⑥ 子安堂は松木大工の躯体に、後藤功祐という江戸の宮彫師の彫刻がつけられていて、大工と彫物師による協働作品である。

VII まとめ

松木左内の妙法寺本堂の設計手法として、基本的な雛形である匠明と比べた結果、軸部や長押など、同じ部分もあったが、柱の間隔や軒の出、縁廻りの大きさの変更などにより、外観のプロポーションが異なっていた。軒の出や柱高さは時代とともに大きくなる傾向が見られるが、松木左内の妙法寺には独自の割付けが伺える。

松木高造による子安堂は、本堂の様式と似ているが、装飾の荘厳さは別物である。本堂と子安堂が作られた時代の差は大きく開いているわけではないが、江戸の宮彫師と共に手がけることでこれまでにない精巧で重量感のある建物に仕上がっている。こうした彫物師との関わりは、下山大工の新しいことに臆せず、進取的な気質がよく表わされているのではないかな。

参考文献

- ・山梨県立図書館「甲斐国社寺記 第4巻」1968年
- ・身延町誌「下山大工」(神社・寺院)
- ・小室山復興奉賛会
- 「徳栄山妙法寺本堂新築伽藍修復落慶記念誌」2000年
- ・磯貝正義「甲斐百寺」郷土出版社 1996年
- ・山梨県教育委員会「山梨県の近世社寺建築」1985年
- ・加藤為夫「下山大工史資料」2004年